

第4回 ESD 研究会「国際協力と開発教育：援助の近未来を探る」

上平泰博(大田区こらぼ大森:子ども交流センター館長)

1. 歴史認識と具象認識を重ね合わせる重要性

本書は歴史的系譜と歴史認識（ほぼ各章に貫徹した展開）の重要性と、「アイ子」という登場人物でもって、開発教育の本質に迫る事象典型例で対比させている。

この手法は読者にわかりやすく鋭意に理解させるという次元の話だけではない。史実抽象化のプロセスには、必ずこのような具象事実や背景が累積された結果なのであって、歴史的過去と現在とは表裏一体の関係にあるのだと、学習者は常々把握しておかなくてはならないということであろう

2. 「内なる国際化」「足下の国際問題」を意識しながら、世界を「串刺し」にしてみる(123 頁、124 頁)

開発教育協会の①から⑤までの具体的な目標(135 頁)に到達するには、いま自分の生きている日常の足下の状況をも意識して掘り起こす作業(実践)がなければ、つまりはそこを起点に世界を「串刺し」(串先、串元は逆でも良いが)にしてみないことには、参加型開発の援助のありようがうまく説明も展開もできないのではないか「第九章 自分・地域・世界をつなぐ学び」のことでもある

3. 慈善型」「技術移転型」「参加型開発」の流れ

「PRA 参加型農村調査法から PLA 参加型学習行動法へ」といった開発プロジェクトのタイプ分け、参加のはしご、段階というものをどうみておくべきなのか(第二章と第三章と四章をめぐって)

「参加型学習による開発教育の虹」(終章)は夢もあって卓越した構図

4. 総合学習の国際理解をめぐる学校教育実践の困窮性と

問題解決学習のためのアクションリサーチという参加型学習から「参加型学習による開発教育の虹」への先駆性について

5. その他

「地域の文化、伝統、技術に根差した開発」(ローカル・ウイズダム) これは開発教育協会の具体的教育目標①「世界の文化の多様性を理解すること」と連結するが・・・ESD の枠組みでどこまで異文化を破壊せず保持できるのだろうか